

教育ができることには限界がある

1. 教育を考える一言

「教育ができることには限界がある」

（広田照幸 『教育には何ができないか：教育神話解体と再生の試み』 春秋社、2003年）

2. 背景

広田照幸は前掲書の序論において、教育をめぐる議論における混乱といかがわしさについて指摘しています。教育という営みが必然的に持つ不確実性に原因の一つがあるとしたうえで、教育に関する議論において「もっとも美しい『べき論』や、もっともわかりやすいスローガンが、無責任にはばをきかせることになる」と問題視しています。こうした問題意識のうえに、上記の言葉は書かれました。実際にはもう少し長く、こう書かれています。「教育ができることには限界があるし、やるべきことについて限界を設定すべきではないだろうか」と。

3. 考察

ある教育的働きかけが、生徒にどのような結果を及ぼすかなどわかりません。この因果関係の不明確さゆえに、教育は誰でも好きなことが言える議場となります。この議場で語られる教育についての言説に私はおこがましさを感じる時があります。「心の教育」とか「子どもを救う」とかいう類いのものがそれです。こういったロマンチックな言説を教員が自分の言葉として語るとき、まるで自分が生徒の人生をコントロールできるかのように思っているかのような自己陶醉を感じてしまうのです。それは言説をあまりにも素直に内面化した結果とも言えそうです。

現在、学校では様々な領域の教育を抱え込んでいる状況です。そうした状況下で、学校は、言説に踊らされて教育の万能を信じ、何から何まで学校で背負い、新たな領域の教育を取り込んでいっているように見えます。

教育に関するロマンチックな言葉を公に批判するのは難しいことかもしれません。ロマンチックな言葉は「殺し文句」（新堀, 1985）となって批判的な声を抹殺しようとしています。

教育にロマンを求めることは、関係者に希望を与え、動機づけるという点で完全には否定できません。しかし、教育に関する思い込みを脱却し、思考停止に陥らないためにも、あえて「教育の限界」を唱えることの意味は大きいと思います。

引用・参考文献

新堀通也 『「殺し文句」の研究』 理想社、1985年

広田照幸 『教育には何ができないか：教育神話解体と再生の試み』 春秋社、2003年